Aug. 1877.

Glad Tidings

よろこびのおとづれ

神の十誡を勧むるの歌

天も地も・いまだあらねば・月も日も・いまだてらざる・そのさきに・さりえ
いまし〳〵・しき〳〵の・父とあがむる・御神は・いまにあらぬ・みづがきの・
遠きむかしに・
モーセてふ・預
言者として・世
のひとに・まも
るためにと・か
しこくも・十の
命令を・ことを
にて・さづけし
まひし・のみな
らぞ・御てづの
らにも・石にさへ・ちりをめしたまふ・御しざなを・しつとくもまし・しつとけを
その おやむねを・今ここに・かしり いでなん・しがとみに・耳をかしむけ・
みことをを・きゝ もらそなよ・御神の・しめしたまふく・なんぢらが・奴隷と



ありし・エヂプトの・地より なんぢを・みちびきし・神は これなり。(一)我おきて・ほかに神なし・宜人よ・ほかの ものをば・かみとして・をがむ ことなかれ。(二)偶像も・またつくる なよ・ひさかたの・天のうへより・あらかねの・土のうへ また・その 下の・みづの なかなる・もろもろの・物の かたちを・かたどりて・造り きざむな・また それに・ひざまづくなよ・なんぢの・神なる エホバ・なんぢの・神なる これは・その 誉を・他に 帰すを・ゆるさねば・われを にくめる・ひとは みな・その 子よりして・その まごを・三たび 四たびを・代を へても・罰は かならず・およびなん・心して きけ・世の人よ・我を 愛して・命令をば・まもらん 人は・百千たび・世を ふる までも・その めぐみ・たえず あるべし。(三)人びとよ・エホバの 御名を・いたづらに・となふる なかれ。エホバ それを・つみ なしと せじ。(四)なんぢは・六日の うちに・おのおのゝ わざを つとめて・七日めは・つねに やすみて・その 日をば・きよく まもれよ・なんぢの・神の エホバは・天地を・あらゆる ものを・ことごとく・六日の うちに・つくりをへ・その 七日めに・躬自ら・やすみ たまひて・あの 日をば・きよき 日とし・よび たまふ・なんぢの また・めしつかふ・しもべども より・かふ ものも・そこに とゞまる・ことぐにの・人も しか せよ。(五)なんぢの・神の エホバの・たまへりし・この 地に おいて・なんぢの・いのち ながめん・その ために・父と 母とを・ねんごろに・うやまひ なせよ。(六)つゝしみて・人の いのちを・かならずも・そこなひ なすな。(七)とりさけて・男女の・おひさをば・よく つゝしみて・かりそめも・道ならぬ こと・思ふ なく。(八)またつゝしみて・人の もの・ぬすむ こと なく。(九)いつはりの・

あかしを なして・ゆめ人を・しふる ことなかれ。(十)まさひとの・いへを むさぼり・まさひとの・妻を むさぼり・まさ人の・しもべどもをも・牛驢馬も・人の物をば・なに一つ・むさぼらんとは・おもふなと・このみこと ぞれ・所射鹿を・とむる河邊の・若草の・さかゆる人も・名にしおふ・越のくになる・白山の・かしらの しろき・年老も・ひとしく ともに・まもる べき・命合に あれば・わが ともよ・この おふせをば・まもるの・まさとて かたく・ふかく心に・しるせ わが とも・

しづや しづ しづの をだまき くりかへし こゝろを きよく なす よしもがな

明治十年四月三十日　　高橋吾良

をさなき子供に みちびかれたる 人の はなし　(Led by a little Child.)

アメリカ國の 西部に 天主教を 信ずる ひとりの人 ありけり それに 年ごろ 七つ ばかりの 娘 ありけるが かねて より ひとの すゝめに よりて 耶穌教の ソンデイ スクウルに ゆく ことを なせり その ころ かれの 父おやは しきりに おのれの 靈魂の ことを おもひ わづらひ その 苦ひが いやまして 夜の間も やすやすと 眠りかぬる ほどなりき 一夜 あまりの くるしさに 夜なかごろ 臥床より おきあがりて 神に いのらんと しけれども いかに いのるべきか おのれは その しかたを しらざれば その 妻に むかひて おのれの ために 神に いのりくれん ことを 請ひたるに かれも おなじく その いのるべき しかたを 知らずと 申しければ さらば いかゞ すべきかと 困りはてゝ ゐたりしが おりから マリヤ(娘の名)は この ことを よく しるべしと 妻の いふに より さらばとて ちゝおやは 二階の マリヤが 臥間に ゆき しづかに 呼び おこして 下に つれくだり マリヤよ そなたは 神に

いのる ことを よく しるやと たづねけれバ マリヤ こたへて これは よくしと いふ しかれバ 汝は ひざまづきて
父が ために 神に いのり くだんのと いへバ しかる べしと いひて ひざまづき 天に ましませ 我らの 父よと
まづ 次第に 主の 祈と いひ つぎに おのれの ことにて 神に ねがふくは わが 父と あふぎて これに めぐみを
あたへ イエス クリストの いさをに よつて その すべての 罪を ゆるし たまへと かれの 父の ために いのれり
この いのりを 終れる とき 父 また いふ マリヤよ 汝は 聖書を よみうるや マリヤ いはく しかり 父よ これ
ために よむ べきの 父 よみきかせよと いひければ マリヤは 聖書を とりて ヨハネが しるせる 福音書の 三章
より よみ はじめ モーセ あれ野に 蛇を あげし ごとく 人の子も あげらる べし これ すべて かれを 信ずる
ものに ほろぶる こと なくして かぎり なき いのちを うけさせん ため なりと いふ 句に いたれり その とき
ちちの いはく マリヤよ その句は そなたに あるや マリヤ こたふ しかり 父よ イエス みづから かく いひたまへり
父 また いはく それこそ わが 要する ところの なり マリヤ いはく 父よ その つぎを ききたまへ それ 神は
その うみ たまへる ひとり子を たまふ ほどに この世を あいし たまふ これ それを 信ずる ものに すべて
ほろぶる こと なくして かぎり なき いのちを うけさせんとて なり 父の いはく これは 我 ごときもの ため
なり すべて かれを 信ずる ものは これ かれを 信ずる ことを うけ これかれを 信ずと いへり その とき より
して かの 父は イエス クリストの まことの 救ひ主 たる ことを 悟りて もとの くるしみに はなれて 生涯
よろこびて ありけるとぞ

尾なが猿のはなし (The Long-tailed Monkeys.)



むかし一群の尾なが猿ありて ある澗を わたらんと したり されども 橋なくて あゆみ わたる ことかなはざりしに その 川の 両側に 二本の たち木 ありければ かの 獣らは 例の ちゑに まかせて チヨコ〱と 此岸なる 樹によぢのぼり その うちの かしらめきたる 猿 まづ うはべに ひとつの 丈夫の 枝を 占むれバ つぎのもの その 尾に とりつき その つぎ〱と かくの ごとくして たがひに あひ つらなり つひに ひとすぢの 綴と なして ほとんど 水面に 達したり



ときに ひとりの 旅人 ありて そこらに これを ながめゐたり やがて かの 猿どもは その くさりに なりたる かたちを あとさきへ ふりはじめしが しばらくして いやはてに をりし 猿 かなたなる たち木の 根もとに とりつきければ それより えだ〱へ つたはつて また つひに 梢まで 攀のぼれり それと

見(み)るにもやくも相圖(あいづ)とせしとみえて こなたの はやざるは おのれが もてる ところの 枝(えだ)と しづかに はなち
ければ その綴(くさり) まつたく やぶれそに たちまち かなたに とゞきたり こゝに おいて かの けものは よろこびの
歌(うた)と 奏(そう)して 四方(しはう)に ちりゆきたりと いふ さて 世間(せけん)の 兄第姉妹(きやうだいしまい)たちも この 尾(を)ながざるの ごとく たがひに
あひ たすけなば その あいだには 不和(ふわ) あらそひなど じつに なきなる べし

悪心(あくしん)の こと　(Sin in the Heart.)

わたくしは 悪心(あくしん)の しわざと みて おやきに こゝろと いためる ことが まゝ ありますが すべて 子供(こども)に 口(くち)に
わるい ことを いはせたり 手足(てあし)に わるい ことを なさせたりします その 子(こ)どもを まよひの 途(みち)へ いざなひ
ゆくなんどは 悪心(あくしん)の しわざに よる ことで ござります
もし イエスが この 悪心(あくしん)を おふひ きよめて くださると いふ ことが ないならなんと なれば かんがへるも
おそろしひ ことでは ありませんか なかには 心(こゝろ)の うちに ある ことは じきにも しれる ものでないと おもふて
ゐる ものも あります けれども それは まつたく まちがひで ござりまする なぜと いふに ふるい 諺(ことわざ)にも 隠(かく)れた
るほど あらはな ものは ないと ある とほり 一時(ひとゝき)は たとひ しれない やうに みえましても いつのしら こゝろの
うちに ある ことは あらはれるに ちがひ ありません
時(とき)としては こゝろの うちに ちいさな 聲(こゑ)が あつて 手(て)や 足(あし)に この ことを しろ あの ことを しろと いひつける
やうに おもむきます それゆゑ この あくしんが 子供(こども)に いさかひを すゝめて ゐる ときなどは たとひ その 母(はゝ)

おやが けふは どころへ いつては ならぬぞと まをしても その ちいさな こゑが うちけして なに けんくわは しても よい また おつかさんの いふ ことを きかずとも よい などゝ いひきかせる やうに 見えます してみれば なんでも この 悪心が すべての わるい ことの 源で ございます それゆゑ たゞ この こゝろに イエスに きよめて いたゞきますなら 手や あしや 口は おのづと きよまりて また をとなしく なりますに ちがひ ありません

凶夢のはなし (The Bad Dream.)

おつかさん〳〵 私は ゆふべ たいそう こはい ゆめを 見ました あの 眞黒な 蛇が ゐました から わたくしは 一生懸命に なつて にげやうと しました けれども ひとあしも さきへ でる ことが できません かつた さうして くるしんで ゐまする うちに 不圖 ゆめが さめました けさ その ことを 隣の おつるさんに はなしましたら それは きつと おまへが 何か わるい めに あふ しるしだと いはれました きいて 母おやは 莞示して これは なにも わるい ゆめ しらせる などゝ いふ しるしでは ない たゞ ゆふべ おまへが 向の おちよさんの ところで なにか おなかに あたる やうな ものを たべた しるし だらう 何を たべたか おぼえて おいでかえ ハイ おいしい ものを いろ〳〵 たべました アヽ それだから そんなに おそろしい ゆめを みるのだ しかし その わけが わからう なにに も せよ わるい ゆめを みて ものごとの 前表だ などゝ おもふのは まことに 馬鹿らしい ことで 神様は わきく〳〵と いさめるに さやうな しかたを もつては なさらない 物の 分別を する やうにとて 道理と いふ ものを あたへ また 道を あきらかに する やうにとて 聖書と いふ ものを おくれ なさつた それだから お千代

さんでも どきでも うきは こるい えるしぐ など〜 いつても やんとうと おもふよは およぞない そうして
それは いさつて こるいくせで あるとまをしまして
さて世間よは ちやうど あの こどもの やうな
御方が まぞ さくさん ありまして いや茶碗が
あもき〜ば どうぞとか櫛の齒が かけれバ かう
ぞとか けふは 旅ぞちと えない 日がぶぞとう
鴉なきが こるいとう その やう いろ〳〵の影も
形も ない ことと いひさて〜 いふぬ氣と もむ
ひとが ありまそ なんと まわ かこい そうな
ことでは ありませんう えのし その ひとさちも
ひとりの いきて をる まことの 神さまが 私ど
もと守て くぞさると いふ ことと えつさなふ
さやうの ことは いさし まそ まいよ
かきゆきて ダマスコよ ちうづきける とき たちまち天より光ありて このもと めぐり照ふせり このき地よ さかる
ろのとき サウロ サウロ なよ ゆゑ こきと せむるやと いふ聲と きけり〔使徒行傳 九章ノ三四〕



サウロ ダマスコよ ゆくう